
works.01

さびしんぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

works.01

【Nコード】

N5574Z

【作者名】

さびしんぼう

【あらすじ】

2x年、人類の数は著しく減少し、世界には二つの大国とその周辺の十にも満たない小国ばかりとなっていました。その二つの大国を結ぶ唯一の道、青空のもと荒野に真っ直ぐのびるその道に一軒の宿がありました。この物語は宿を経営する一組の男女とそこを訪れる旅人達の日々です。

夢01

夢をみていた。SF小説を読み終えたような、曖昧で、境界が分からなくなるほどの酩酊感に僕の身体は侵されていた。数多の星が頭上遙か彼方にも、足下吸い込まれそうなほど深いところにも 散りばめられている。間違はなく夜であるはずなのに、硝子を通して見る街灯のような淡い、透き通った光で溢れている。橙、紺碧、檸檬、新緑、血赤、それぞれの星達が発する色が混ざる事はない。そんなところに僕はいた。何も考えず漂っているのは意外と、気持ちのよいものではなかった。綺麗であるが焦点の定まらないような光景に嫌になる。銀河鉄道に乗ったジヨバンニ、あるいはカンパネルラもこんな気持ちだったのだろうか。光の眩しさに心は定まらず、不細工に揺れていた。次の思考が始まろうとするとき、光は瞬く間に消え、僕は目覚めた。

宿屋の朝

朝日がのぼり、白みがかつた空に少し赤が差し、熱を帯び始める。鳥達はそれに引き付けられるように羽ばたき、重なって大きく聞こえた羽音はあつという間に小さくなっていく。その音に目を覚まし、しつとりと汗ばんだシーツから身を起こす。まだ体には覚醒していないようで、思考と行動があっていない。羽音が止んだかと思つと今度は水が流れる音が下から聞こえてくる。時折、食器のぶつかる音や包丁が刻む音が微かに聞こえてくる。彼女が厨房でこなす仕事はほぼ完璧に近く、時間さえも正確だ。いつも通りの朝である。この音を聞いてやつとはつきりと目を覚ます。ベッドから出て着替えをし、用を足してから階段を降りていく。

廊下を抜け、厨房に入ろうとしたとき、彼女が配膳する食器を抱えながら出てきた。

「おはよう、柚稀。」

高く積まれた食器の向こうからすつと顔を出し、

「おはよう、涼。」

この宿を切り盛りする女将である出原柚稀は大きくはないがはつきりと聞き取りやすい言葉を返した。

「今日は一組しか泊まってないから、朝御飯はもうできてる。ひと足遅かったわね。」

「別にいつも通りの時間に起きてきたんだからしょうがないよ。ところで、一組のお客さんしかいないのは分かっているけれども、それならそのお皿の塔はどうしたのかな。」そんなに背が高くない彼女が抱えている皿を、僕は見て言う。

「さつき電話があつたの。何故かは分からないけど、二十人の団体の予約だつて。宿泊は明日の予定なんだけど、この朝早くに電話してくるなんてよほど急いでいるのね。電話の向こうも慌ただしかつ

たし、だからちよつと不安なの。一応準備だけは早めにしておこう
と思つて普段使つてない皿を出してきたんだけど。」

言葉では困つているといつた感じではあるが、顔は少しにやけてい
た。無理もない。最近、というより慢性的にだが、この宿を訪れる
客は少ない。この宿の前に続く道の先々の二国を行き来する人はあ
まり多くないのだ。そうなると必然的に経営は苦しくなってくる。

一日五人にも満たないこの宿に二十人ともなれば、まさしくうれし
い悲鳴という言葉がびったりなのである。

「……珍しいこともあるもんだね。そんなにお客さんが来るなんて
何年ぶり、いや、初めてなんじゃないかな。」

口に出してからあらためて考えると確かに怪しさは拭えない。都合
のいい話なんて滅多にありはしないのだから、何かしら理由がある
もので。

「今さら、気にしてもしようがないでしょ。もう予約受けちゃった
んだから。さあ、涼も早く仕事して、到着は明日だけど使つてない
部屋の掃除とか、食事の仕込みとかやることは山積みなの。」

柚稀はそう言つと、抱えた食器を危なげなく、そそくさと食堂の方
へと運んでいった。僕も厨房で手をよく洗い、朝食の配膳の準備に
取り掛かる。

二つの国と一本の道

今日の朝食は白米、味噌汁、昨日僕が仕入れてきた豚肉を香ばしく焼いて仕上げた生姜焼きだった。柚稀の料理の腕前はなかなかである。食欲が落ちがちになるこの暑い季節にもかかわらず、次々に箸をのばしたくなる味だ。屈強な男二人もあつという間にたいらげ、特別に改造したとみえるオートモビルにまたがり、すぐに出発していった。彼らは東の大国で科学、工業技術に極端というほど発達した東京国を訪れるつもりだという。

東京国は眠らない国とも言われ、そこに住む十五万人の人々は昼夜を問わず、経済活動を行なっている。新種のエネルギー資源を用いた発電システムによって、絶えることなく電気が供給されているからこそ、なせる業である。東京国以外の国はエネルギー資源に乏しく、この宿に電気を供給している近隣の小国でもそれは同じで、深夜には供給が止まってしまふ。そのため、交通機関がこの辺りには発達しないのだ。そちらに電気をまわすと自国の需要に対して不足してしまうのだ。基本、他国のことには口出しをしないこの世界の慣習では東京国が一方的に供給するのをもためらわれている。そして何より、それを嫌うのは西の大国、四ヶ国なのである。

四ヶ国は東京国とは逆のベクトルで発展した国、つまりは自然大国である。周りを海に囲まれ、晴耕雨読の字が表すように、晴れた日には農業や、天然素材を使った織物などの軽工業を行い、雨が降った日には本を読んで過ごすようなそんな国なのである。この四ヶ国の人々は科学技術を余りよく思っていない。世界の人口減少を招いてしまった原因のひとつと考えているからである。別に東京国を恨んでいるとか、憎んでいるとかそういうことではない。ただ科学技術を受け入れられないのだ。他の小国と同じように電気の供給はぎりぎり深夜には月の光だけになる。十万人程の人間が朝、夜と規則正しい生活を送っている。その暮らしを守るためにも交通

機関を余り発達させていないのだ。なのでこの二国を結ぶ唯一の手段がこの道である。この二国が成立したころは全くといって交流や貿易がなかったがここ百年程で多少そういったのが増えてきたらしい。二国を結ぶ道ができたのは丁度その頃で、今ではこのように旅人や商人達が利用している。

荒野の黄土のなか真っ直ぐにのびるアスファルトの灰色、中央を分ける一本の白い線、これが遙か先まで続いている。

只今の時刻は九時半、見上げると空は雲ひとつない青空であった。

非日常

朝食の片付けを終えて宿屋の玄関を掃除していると、

「おはようございまーす。今日もよろしくお願いしまーす。」

元気な挨拶とともに三人目の従業員、千堂千鶴がやってきた。頭を下げるとブロンドがかったセミロングの髪が上品に揺れる。

「おはよう。千ちゃん。さっそくだけど今日はすぐに仕事に取り掛かってほしいんだ。」

「何かあつたんですか。」

普段なら客も少ないし、仕事も少ないので別段急ぐことはない。だから彼女にもこの時間に来てもらっている。しかし、今日は違う。首を傾げる彼女に、早朝に団体の予約が入ったことを伝える。

「本当ですか。珍しいこともあるんですね。台風でも来るんじゃないですか。」

茶化しながら言うてはいるものの、余り冗談になっていない。こんなことは本当に初めてなのだ。僕はどうしても変に勘繰ってしまう。しかし、千堂はそんなことを言いつつも、楽しそうにしている。

「やっと宿屋らしくなってきましたね。ついに私の出番ですか。急いで着替えてきますね。」

鼻を鳴らして足どり軽やかに、更衣室に入っていった。彼女は本来、給仕として雇っていたが、今に至るまで仕事は僕と柚稀で事足りていたので、掃除ばかりしてもらっていた。やっと接客ができるのはやはりうれしいものだろうか。掃除を再開しようと外に出ようとすると、

「涼、何……にやけている……の。」

突然背後から声がしたかと思うと、真っ白なシーツの山がそこにはあった。

「……手伝ってよ……。」

苦しそうな声で柚稀が訴えている。朝みたく、体より大きなものを

運んでいて正面からは彼女は見えない。僕はシーツを半分程抱えあげる。

「洗濯ご苦労さま。早かったね。」

やっとシーツの重力から解放されて楽になったのか、ふうと一息ついてから今度ははつきりとした口調で言う。

「シーツって意外に重いよね。水を吸ってる分もあるけど、なかなか大変なの。普段から慣れておいた方がいいのかな。無理よね。お客さんいないし。仕事はいつも楽し。……急に毒を吐きはじめた。余程身に堪えたのだろうか。朝から口数も普段より多い気がする。」

「知ってる、涼。人間ってただお金を得るためだけに仕事をしているわけじゃないの。余りに暇をもて遊ぶのは堕落していくだけ。数百年前も難民キャンプで何もする事がなかった人は、性行為ばかりに及んで性病が蔓延したらしいの。知識とかそんな問題じゃなくて、やっぱり暇過ぎるのはよくないと思う。やるべきことがあるのは必要なことなの。」

やはりおかしい。いつもはなんの脈絡もなしにこんなこと言い出したりはしない。

「……もしかして予約入ってとてもうれしい?。」

「……言わないで。」

普通に喜べばいいのにもかかわらず、恥ずかしそうにする。

「商売として宿屋をやっているんだからお金がたくさん入ってうれしいのは別に当たり前のことなの。私だけ舞い上がっているのはバカらしいじゃないの。」

「そんな気にならなくていいよ。それより、さっきの言い方だと暇なとき僕たちがまるで…そういう事ばかりに耽っているみたいじゃないか。」

柚稀は惚けたような表情で、

「別に私は、あなたとならいつだってそういう関係になってもいいと思うているの。」

……さいですか。聞いたこっちが羞恥で真っ赤になりそうだ。

「朝から何やってんですか。このバカ夫婦は。」

給仕姿に着替えた千堂が戻ってきていた。

「……どのくらいから聞いていた。」

「ご苦労さま辺りからですかねえ。」

……どこで着替えていたんだらうか。

時刻は十一時になるうとしている。空は一層青さを増し、良い洗濯日和となりそうだ。

真つ白な万国旗

洗濯し終わった二十余りのベッドシートとシャツを三人で抱えて、宿屋の外に出る。

「じゃあ、涼。いつも通りこのロープよろしく。」

僕は柚稀からロープの片方を託され、宿の前の道を横断していく。たまにオートモビルやトレーラーが通るだけのこの道は幅が三十メートルほどある。無駄に広い気がする。反対側に着くとそこにある七メートルほどの高さの物見台にのぼり、二本のロープを少し離してフックに結ぶ。

「いいぞー。」

大声で反対側に知らせる。柚稀達は宿のすぐ近くにある鉄塔の十メートルぐらいの高さまで登って準備していた。鉄塔は道に沿って東にも西にも等間隔に続いていて、さらにその少し上には電線も通っている。これがこの宿のライフラインである。こちらの呼ぶ声に気づいて千堂が筒状のパイプにシートを掛けて洗濯挟みで固定する。そのパイプにロープを通し、高低差を利用して滑らせてくる。シャツや浴衣は袖にパイプを通してあるので少し奇妙な感じがする。どんどん洗濯物がこつちに向かってくる。一本にはシートばかり、もう一本にはシャツなど。ここまで滑って次々とパイプ同士がぶつかる高い湯いた音が続いて響いた。もうこちらではすることがないので、物見台をおり宿側に戻る。

道を渡ると柚稀達も降りてきていた。

「壮観ですねえ。こんなに洗濯物を干したのは初めてです。」

言われて見上げると確かにそれは見事なものだった。真つ青な空と純白のシートが比較されそれぞれが際立ち、風になびく様子に思わず息を飲む。

「物見台も残っているのだし、前に宿に住んでいた人たちは こんな景色をいつも見ていたかもしれないのね。」

柚稀も目を奪われていた。頬に少し朱が差す。僕は、柚稀のその横顔に魅せられてしまった。中性的な顔立ちに、美しさを感じさせる褐色の肌、銀白色のショートヘア、全てがこの景色によって引き立てられていた。千堂が輝く太陽ならば、柚稀は、自己主張しないのに昼でもその存在を示し、しかし今にも欠けてしまいそうな月であろう。非の打ち所がないこの光景に、一瞬のみにしかみえないこの姿に、肌が粟立つ。「そういえばこのシャツ、あれですよ、あれ、そう、万国旗みたいですね。」

聞き慣れない言葉にやっと視界は現実に戻される。

「……千ちゃん、その万国旗って何のこと。」

「前に何かの本で見ただけなんですけど、まだ世界にたくさんの方があつた頃にですね、こういう長いロープにそれぞれの国の国旗をつけていって、何か楽しそうな行事の度に飾りみたいにしてたらしいですよ。それはとてもカラフルで素敵だったんですから。」

真っ白なシャツでも壮麗であるのに、彩り豊かになつたらどれだけ素晴らしいことだろうか。いや、それだけじゃない。おそらく、その当時はその色だけでなく、国がたくさんあるという、つまり人がたくさんいるという暖かさがあつたに違いない。一度見てみたいものだ。

そろそろお昼になる。今日はやるべきことも多く、あんまり時間はとれそうにない。もっとこの洗濯物を見ていたかったが、宿に戻って昼食をとることにした。

今に至る世界

2000年現在、世界から人のほとんどが消えたのには訳がある。2010年頃まで七十億もの人々が生きていて、争いながらも、なんとか生活をしてきた。そのころにはすでに、東京国を除く、現在の科学技術の8割がたが完成していた。当時の科学技術の進歩は凄まじかった。しかし、東京国と比較するとだいたい5割ほどであろうか。もしかしたら、世界は均衡を保っていたのではなく、人がただそれを破壊するだけの力が無かっただけなのかもしれない。

その力を手にしてしまったのが2100年頃、世界はある装置の登場により、暴落の進路をとった。威力的には核エネルギーに到底及ばず、一丁の拳銃より僅かに強い程度のものであった。特出すべきはその発動条件。人が犯罪を犯そうとしたり、あるいは人を憎んだり、裏切るような行為を思い描いた場合、それが実行に及ばないものだとしてもその装置は発動する。特殊な電磁波を発し、人を内部から攻撃して脳を直接破壊する。第三者からは人がただ倒れただけにしか見えない。この装置は世界至るところに設置されていた。

もちろん、こんな装置が最初から受け入れられた訳ではない。人の思考など機械に読み取れるはずがない。そこでまず監視カメラとセットで設置し、犯罪の防止という目的において、人の判断で攻撃が加えられるようにした。威力も最初の頃は気絶させる程度だった。しかし、この装置の登場により、設置した地域の犯罪率は著しく低下、着々とその範囲を拡大させていった。なかにはプライバシーが侵害される、という意見もあった。しかし、人の命は何にも変えがたい、とう思想や当時のテロ犯罪の拡大、インターネットと呼ばれる情報網の広がりによる疑心暗鬼的な思考の拡大に次ぐ拡大。それより、この装置は需要を増していた。警察の主な仕事もこれに移項していった。そして遂に一部がコンピュータ制御される。この頃になると遙か昔から言われていた嘘発見機なるものが発展し、人の考

えていることの概略は掴めるようになっていた。この二つを併用した形式が徐々に一般化され、警察は当然のようになくなった。また、思考の程度により、攻撃の威力も増すようになった。完全に犯罪がなくなるまであと一歩のところまで来た。

そして2150年、この防犯システムが完全に自動化されるにあたり、犯罪ゼロを目指して今までの攻撃基準より高い水準でプログラムが改善された。

システムを起動しようとスイッチを押した瞬間、世界は変わった。

血のない殺戮

スイッチを入れた瞬間、世界各地から聞こえる、深海より深い碧い悲鳴、鮮烈なほどまでに赤い怒号、点滅する黄色い嗚咽、血の流れない殺戮。負の連鎖だった。人が一人死ぬ度に起こる感情に、また感情無く反応する装置。また一人、また一人、死の風が吹いたかのように倒れていく。綺麗な死体が街中に溢れる。スイッチを入れた者はすでに事切れていて、誰も止められるものはいなかった。コンピュータが反乱を起こしたとか、そんな大それた話ではない。人が組んだプログラムによってその装置は機能し続けるのみである。それは人のささいな嫉妬や恨みにまで感知するようになっていた。人間そのものを否定しかねないようなプログラムだった。三日ほどで人口は目に見えて減少していった。残っていた人は偶然にも、装置が壊れていた、あるいは修理中であつた地域の人のみである。それが東京国と四ヶ国なのだ。

機能し続けた装置は壊れ停止、一週間足らずで世界の人口は七十億の1%にも満たなくなつてしまつた。

今となつてはそのプログラムが意図的に仕組まれたものなのか、人間の感情か汚かつたのかは分からない。その出来事により、科学技術をどうしても受け入れられなくなつた人が集つたのが今の四ヶ国になり、それでも尚、科学技術と共に生きるのが今の東京国なのだ。

銀白

正直疲れてしまっていた。いつもの倍以上掃除して洗濯をしつ、備品をチエックするのは思った以上の労働だった。柚稀も目に見えて疲労していた。

「お二人は休んで下さいよ。今日は私が昼食作りますから。出来上がったら食堂に持っていきますねえ。」

千堂の言葉に甘えて、柚稀と食堂で休むことにした。

「……あり得ないの。たったこれだけ仕事しただけなのに。どれだけ暇だったのかしら。衰えすぎ……。私達まだ二十二歳よ。」

「まあいいじゃないか。午前であらかた片付けたんだから今日はまだ余裕がある。問題は明日だよ。団体さん明日の夕方に着くんだったっけ。」「そう、でもちゃんとした時間は聞いてないし、早めに準備しとかないと。」

考えれば考えるほど疲れが溜まっていくようだった。柚稀はテーブルに突っ伏して表情を伺うことはできない。銀白の髪もなぜだか色褪せたようにみえる。これは柚稀の気持ちなのか。それとも僕の気持ちなのか。

いつもと違うことの連続に、自分だけが取り残されたような気分になる。果てしない孤独が体を包み込むように、僕の心の弱い部分が沈んでいく。自殺願望とかそんな大それた気持ちではない。ただ寂しいのだ。どうしてもこたつにから脱け出せないように、優しい暖かさが欲しくなる。暑い夏なのに気分は冬のようだ。仕事が少し忙しくなって、少し疲れただけでこの様だ。心底情けないと思う。僕は弱い人間だ。

ふと、向かいに座った柚稀の頭に触れてみたくなった。いつも見ているその綺麗な髪に触れたくなった。そつと手を伸ばし、軽く撫でる。柔らかいその銀白は確かな温もりを僕の手伝えてきた。

「んっ……………」

柚稀は一瞬反応しただけで顔を上げようとはしなかった。僕は何回も柚稀を撫でていた。ふわっと石鹸の匂いがした気がした。絹のように滑らかな髪がさらさらと揺れ、そよ風が吹いたかのようになる。伝わる体温が僕の気持ちを満たしていく。好きな人の体温ってというのはどうしてこうも離れられないほどの魔力があるのだろうか。誰かに解明して欲しいものである。さらに少し指を伸ばして柚稀の褐色の頬に触れる。褐色といっても健康的な日焼け程度のものだ。人差し指で触れたそのほどよい弾力に、触ってはいけないかのような禁忌にも触れたような少し背徳めいたものが湧きあがってくる。「ん、ん。」

さすがにこれは何回も触られるのは恥ずかしいのか耳が少し赤くなっていた。

「……柚稀。」

「……何。」

「呼んでみただけ。」

「……涼。」

「どうした。」

「呼んでみただけなの。」

砂糖とバニラがふんだんに染み込んだ空気に僕達はいつの間にか安らぎ、眠ってしまった。

どこまでいっても透き通った青。山も建物も見えない。まっ平らな場所に、くるぶしまで浸かる程の水かさがある。空の青を写した透明な水は冷たくなかった。だがぬるいわけでもなかった。目と裸足から感じる感覚がそこでは全てであった。一面の写し鏡の上に立っているようだ。見上げずとも雲が動いているのがわかる。しかし風は感じられない。綺麗ではあるが無機質な空間に虚ろな心は満たされない。太陽が上がっているのに暖かさは感じられない。世の中には体温が感じられない人がいるし、痛覚がない人もいる。それがどれほど恐ろしいことか。自分の存在が確認できない。もしかしたら足下に写る世界が本物なのかもしれない。そんな考えが頭をよぎったとき、僕は鏡に倒れていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5574z/>

works.01

2012年1月12日01時07分発行